

地方でも農業体験は人を集める力を持っている 「土に触れたい、農作物をつくってみたいという人は 実はどこにでもいるんです」

地元農家が共同で始めた農産物直売所が母体となった、おおむら夢ファームシュシュ。教育ファームを通じて農業のファンを増やし、地元農業の活性化を図り、また教育ファームでの収穫物を加工し直売所での販売にもつなげ、目指すは、生産（一次産業）を基本とした、農業の六次産業化。そうやって農業を楽しむ場を提供することが、地方の農業を元気にしていくのだ。

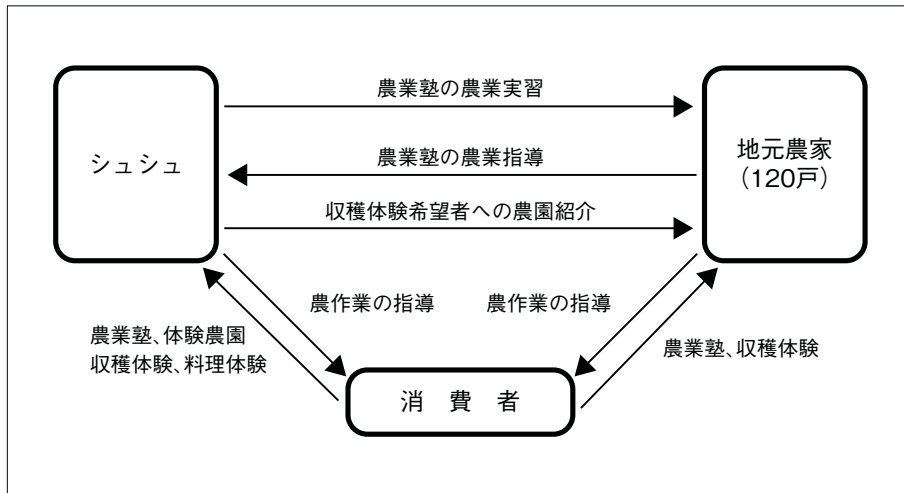
おおむら夢ファームシュシュ

取組主体

- 名称：有限会社シュシュ おおむら夢ファームシュシュ
- 担当窓口
担当課(者)：山口 成美(代表取締役)
住所：長崎県大村市弥勒寺町486
電話：0957-55-5288 FAX：0957-55-5323
E-mail：info@chouchou.co.jp
- 団体等の属性：民間企業
- 構成員数：80人
- 連携団体及び協力団体
属性：民間企業
内訳：120戸の野菜・果物・花卉農家



おおむら夢ファームシュシュの活動風景



取組地域及び地域の特徴

取組地域：長崎県大村市

地域の特徴：

大村市は、人口約9万人の花と歴史と技術の街。このなかでも、シュシュがある大村市の北部に位置する福重地区は、人口約4000人の、果物や野菜などの収穫が楽しめる果樹園や田畑の広がる風光明媚なところ。福重は、「フルーツの里ふくしげ」とも呼ばれ、ナシ、ブドウ、ミカン、イチゴ、ピワ、さらに花や野菜などが生産され、道路沿いには産地直売店も多く、1年を通して50万人以上の観光客が訪れる。

取組内容

(1)目的(目標)

一次産業(農業生産)を基本とし、二次産業(加工)、三次産業(販売、サービス)の一貫性を確立した「1×2×3」の六次産業を目指す。安全、安心、新鮮をモットーに地域の食材を生かして消費者に提供するとともに、農業体験等のさまざまな体験活動を通じて農業の大切さを理解してもらい、農業のファンになってもらうことを目的とする。

(2)取組開始時期・経緯

平成8年8月に大村市福重地区の8戸の専業農家が、ビニールハウスにて農産物直売所「新鮮組」を開始。

平成12年4月に農業交流拠点施設「おおむら夢ファームシュシュ」オープン。

平成15年8月有限会社シュシュに社名変更。

平成19年1月農業塾開校。団塊の世代に向けた帰農支援講座。

平成22年4月農業体験農園を開園。

(3)対象作物

米、野菜、果実、小麦、落花生

選定理由：塾生が栽培したい作物を塾生の要望に応じて栽培。

(4)具体的な取組内容

「農業塾」

農業塾は、自社農園を中心に地元農家の農園を使用し、団塊の世代向けに開校している塾。果樹、野菜、花卉等を、専門の講師、シュシュのスタッフの指導により、植え付け、追肥、除草、収穫等の体験学習を実施。毎年4月と10月に開校して、1年間月1回の年間12回開催している。現在8期生でこれまでに250名の塾生が誕生している。植え付けから収穫までを体験してもらい、さらに収穫物を原料に加工食品を製造し、シュシュの直売所等で販売している(サツマイモとお米を栽培し、酒造メーカーと連携して芋焼酎を製造して販売等)。

「農業体験農園」

平成22年から、耕作放棄地を利用して一般消費者向けに農業体験農園を開園。

1区画(30㎡)の年間利用料金が3万6500円で、種苗、農機具はシュシュで準備し、指導はシュシュのスタッフがこなう。

「収穫体験」

自社農園と120戸の地元農家の農園での果物の収穫体験を行なっている。

「小学生の農業体験」

大村市内の小学校の児童を対象に農業体験を行なっている。

(5)年間スケジュール

農業体験	6月末田植え、10月稲刈り
果物狩り体験	1月～4月末 イチゴ狩り 8月 ブルーベリー狩り 9月 ナシ狩り、ブドウ狩り
収穫祭	11月



そばの播種

(6) 参加者数・属性の実績及び推移

農業塾：団塊の世代を中心に1コース20名の定員。これまで250名の塾生が誕生している。

(7) 経費

農業塾は、入会金3000円と、参加ごとに2000円を塾生が負担。

農業体験農園は、1年間1区画3万6500円の利用料を徴収。

収穫体験は、農園ごとに入園料や持ち帰りの料金が設定されている。

小学校の農業体験は、経費はすべて(有)シュシュの負担で行なわれている。

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

●関係者(団体)との連携の経緯

地元8農家が共同で農産物直売所「新鮮組」を開始したのがシュシュのスタートである。地域農業の活性化を目指す取組みに、徐々に地元農家から賛同が得られ、直売所への農産物の出品や収穫体験の協同実施により、現在120戸の地元農家が取組みに参加している。

●連携を進めるに当たっての課題と対処方法(ポイント・工夫)

〔取組みにおける工夫点〕

「農業塾」では、農業や農産物についてより深く理解してもらうため、体験コースを設定し20名程度を定員として途中棄権がないよう(1、2回の参加で終わらないよう)に、入会金3000円を徴収し、カルチャースクール形式で年間を通したカリキュラムにより取り組んでいる。なお、参加費は1回当たり2000円を徴収している。

農業体験農園を開園し、「農業塾」で学んだ知識を生かして自らが農作物の栽培が実践できる機会を提供している(年間会費3万6500円)。

「農業塾」における農作業体験においては、長時間の農作業は疲れて集中力が散漫になり危険も増すため、1時間程度を限度としてメニューを変更し、楽しく体験できるように工夫している。

農作業体験では、すべてを手作業で行なうべきとの考えではなく、田植えなど農機具の使用が可能な場合は積極的に活用して、農業を楽しめるよう工夫している。

市内の小学校の児童を対象にした農業体験等の取組みでは、学校側からの申し出には極力対応するとともに、子どもたちに地域の農業や「食」に関心を持ってもらうため、かかる経費をすべてシュシュの負担で取り組んでいる。

体験の取組みにおいては、農作業体験により収穫される農作物を使った料理体験など、育てるだけでなく、「食べる」ことの楽しさも学べる取組みも併せて実施している。

「農業塾」の塾生や体験者などの外部の意見を参考に、いろいろなアイデアを取り入れている。まずは、失敗を恐れず直感力を大切に実践してみることが重要と考えている。

〔連携の工夫点〕

地域が一体となって、さまざまな地域の財産(食材・自然環境)を生かしたまちづくりがなされるよう、直売所で生産者情報(生産者の顔写真付きの情報)を掲載して地域の農産物を販売、生産者が独自に取り組んでいる観光農園や農家民泊の取組みの積極的な情報発信、市内小学校と連携した農作業体験の取組みをシュシュの負担で実施し、関係者の取組みを支援している。

直売所出荷生産者の会合(月1回程度)では、生産者の意見等を聞きながら取組みへの協力を呼びかけている。

農作業体験において、指導などの協力を受けた生産者に対してはボランティア的にならないよう指導料とし

て謝金を支払っている。

直売所での農産物販売は、生産意欲のある農家の所得安定のため価格を下げすぎないように工夫しているとともに、地元の生産者が生産した果物や野菜を買い上げ、それを使った手づくりジェラートやパンを製造販売。さらには、施設内のレストランで地元農産物を使ったランチバイキングを提供する等、地元農産物の需要を確保することにより生産者の所得の安定に努めている。

●取組みの課題と対処

地域生産者の高齢化や後継者不足により農作業の負担が年々大きくなっており、地域の農業が衰えてきていることが問題。「農業塾」を活用し、塾生たちでこのような農家を応援する態勢をつくる必要があると考えている。



にんにくの植え付け

●安全管理

ほ場は、段々畑が多く、畦道からの転落等危険な箇所について、シュシュのスタッフが注意を喚起して安全を確保している。

●地方の農業体験農園の成功の可能性

日本の総人口の2%が農業従事者で、それ以外の農家でない人は土に飢えている。体験農園が都会だから成功するとは限らない。都会と田舎の農業従事者の比率は違うものの、土に触れたい、農作物をつくってみたいという人はどこにもいるので、大村市のような地方でも農業体験農園は成立すると思う。

これまでの成果

農業塾については、農作物の生産から加工品の製造、販売までの一貫した取組みにより、塾生が農業の楽しさ、厳しさ、感動を体験し、達成感を実感することができている。

大村市には年間約150万人の観光客が訪れており、シュシュには年間約49万人の方たちが訪れている。シュシュを通して観光客にも農産物を販売することができ、地元農家が農産物をつくる喜びを感じながら生産しており、農業が活性化してさらに地域全体が活性化している。

今後の構想、課題

幅広い六次産業化を目指す。

農業とホテル業界が連携する取組みとして、長崎県内のホテルや農家民泊と連携し、シュシュで収穫体験やパンづくりやウインナーづくり等の体験教室を開催、長崎県内のホテルや農家民泊に宿泊するという体験型宿泊プランを検討中。

おおむら夢ファームシュシュ

みんなのコメント集

取組の
実践者

シュシュのスタッフ

「農業のファンクラブづくりを目指します。消費者に農業の原点を伝えることが今後の重要な課題」

「塾生や体験者からの意見を参考に、いろいろなアイデアを出し、まずは実践してみることだと思っています」

参加者

「農業の楽しさ、大変さ、つくる喜びを実感することができます」

「農産物の価値を正當に評価することができるようになりました」



麦の収穫